

現代日本文學全集

24

谷崎潤一郎集



谷崎潤一郎集

杉浦非水装幀

改造社版

昭和二年二月八日印刷
昭和二年二月十三日發行

現代日本文學全集 第二十四篇

著者 谷崎潤一郎

發行者 山本美

東京市麴町區內幸町一丁目參番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌

東京市麴町區內幸町一丁目參番地
幸ビルデイング壹階

改造社

振替 東京 八四〇二番
電話 銀座 一七三三番
銀座 四五一八番
座 五〇四六番

「谷崎潤一郎集」目次

卷頭寫眞（照影）

序 詞（筆蹟）

痴人の愛……………一

少年……………一六

鷺姫……………一五

信西……………一七

兄弟……………一八〇

二人の稚兒……………一九七

金と銀……………二一〇

The Affair of Two Watches……………二五七

人面痘……………二六七

お國と五平……………二七九

或る少年の怯れ……………二九〇

赤い屋根……………三二〇

年 論……………三二〇

痴人の愛

私はこれから、あまり世間に類例がないだらうと思はれる私たち夫婦の間柄に就て、出来るだけ正直に、ざつぐばらんに、有りのままの事實を書いて見ようと思ひます。それは私自身に取つて忘れがたい貴い記録であると同時に、恐らくは讀者諸君に取つても、きつと何かの參考資料となるに違ひない。殊に此の頃のやうに日本もだんだん國際的に顔が廣くなつて來て、内地人と外國人とが盛んに交際する、いろんな主義やら思想やらが這入つて來る。男は勿論女もどしどしハイカラになる、と、云ふ様な時勢になつて來ると、今まではあまり類例のなかつた私たちの如き夫婦關係も、追ひ追ひ諸方に生じだらうと思はれますから。考へて見ると、私たち夫婦は既にその成り立ちから變つてゐました。私が始めて現在の私の妻に會つたのは、ちやうど足かけ八年前のことになります。尤も何月の何日だったか、

詳しいことは覚えてゐませんが、兎に角その時分、彼女は淺草の雷門の近くにあるカフェエ・ダイヤモンドと云ふ店の、給仕女をしてゐたのです。彼女の歳はやつと數へ歳の十五でした。だから私が知つた時はまだそのカフェエへ奉公に來たばかりの、ほんの新米だったので、一人前の女給ではなく、その見習ひ、——まあ云つて見れば、ウエイトレスの卵に過ぎなかつたのです。

そんな子供をもうその時は二十八にもなつてゐた私が何で眼をつけたかと云ふと、それは自分でもハツキリとは分りませんが、多分最初は、その兒の名前が氣に入つたからなのでしょう。彼女はみんなから「直ちゃん」と呼ばれてゐましたけれど、或るとき私が聞いて見ると、本名は奈緒美と云ふのでした。此の「奈緒美」と云ふ名前が、大變私の好奇心に投じました。「奈緒美」は素敵だ、MONIと書くときまるで西洋人のやうだ、と、さう思つたのが始まりで、それから次第に彼女に注意し出したのです。不思議な

もので名前がハイカラになると、顔だちなども何處か西洋人臭く、さうして大さう俐巧さうに見え、「こんな所の女給にして置くのは惜しいものだ」と考へるやうになつたのです。

實際ナオミの顔だちは、斷つて置きますが、私はこれから彼女の名前を片假名で書くことにします。どうもさうしないと感じが出ないのです。活動女優のメリー・ピクフォードに似たところがあつて、確かに西洋人じみてゐました。これは決して私のひいき眼ではありません。私の妻となつてゐる現在でも多くの人がさう云ふのですから、事實に違ひないのです。そして顔だちばかりでなく、彼女を素つ裸にして見ると、その體つきが一層西洋人臭いのですが、それは勿論後になつてから分つたことで、その時分には私もそこまで知りませんでした。ただおぼろげに、きつとああ云ふスタイルなら手足の恰好も悪くはなからうと、着物の着こなし工合から想像してゐただけでした。

一體十五六の少女の氣持ちと云ふものは、肉身の親か姉妹でもなければ、なかなか分りにくいものです。だからカフェエにゐた頃のナオミの性質がどんなだったかと云はれると、どうも私には明瞭な答へが出来ません。恐らくナオ

ミ自身にしたつて、あの頃はただ何事も夢中で過したと云ふだけでせう。が、ハタから見た感じを云へば、軌方かと云ふと、陰鬱な、無口な兄のやうに思へました。顔色なども少し青みを帯びてゐて、譬へば斯う、無色透明な板ガラスを何枚も重ねたやうな、深く沈んだ色合をしてゐて、健康さうではありませんでした。此れは一つにはまだ奉公に來たてだったので、外の女給のやうにお白粉もつけず、お客や朋輩にも馴染がうすく、隅の方に小さくなつて黙つてチヨコチヨコ働いてゐたものだから、そんな風に見えたのでせう。そして侍女が慇懃さうに感ぜられたのも、やつぱりそのせみだつたかも知れません。

ここで私は、私自身の経歴を説明して置く必要がありますが、私は當時月給百五十圓を貰つてゐる、或る電氣會社の技師でした。私の生れは栃木縣の宇都宮で、國の中學校を卒業すると東京へ來て、藏前の高等工業へ這入り、そこを出てから間もなく技師になつたのです。そして日曜を除く外は、毎日芝の下宿屋から大井町の會社へ通つてゐました。一人で下宿住居をしてゐて、百五十圓の月給を貰つてゐたのですから、私の生活は可成

り樂でした。それに私は、總領息子ではありましたが、郷里の方の親やきやうだいへ仕送りをする義務はありませんでした。と云ふのは、實家は相當に大きく農業を營んでゐて、もう父親は居ませんでした。が、年老いた母親と、忠實な叔父夫婦と、萬事を切り盛りしてゐてくれたので、私は全く自由な境涯にあつたのです。が、さればと云つて道楽をするのと云ふやうな氣はありませんでした。先づ模範的なサラリーマン、——質素で、眞面目で、あんまり曲がな過ぎるほど凡庸で、何の不平も不満もなく日日の仕事を勤めてゐる、——當時の私は大方そんな風だつたでせう。『河合讓治君』と云へば、會社の中でも『君子』と云ふ評判があつたくらいですから。

それで私の経歴と云つたら、夕方から活動寫眞を見に行くとか、銀座通りを散歩するとか、たまたま奮發して帝廟へ出かけるとか、せいぜいそんなものだけの事です。尤も私も結婚前の青年でしたから、若い女性に接觸することは無論嫌ひではありませんでした。元來が田舎育ちの無骨者なので、人づきあひが拙く、従つて異性ととの交際などは一つもなく、まあ其のために『君子』にさせられた形だつたでもありません。

うが、しかし表面が君子であるだけ、心の中はなかなか油斷なく、往來を歩く時でも毎朝電車に乗る時でも、女に對しては絶えず注意を配つてゐました。恰もさう云ふ時期に於いて、たまたまナオミと云ふ者が私の目の前に現れて來たのです。

けれど私は、その當時、ナオミ以上の美人はないときめてゐた譯では決してありません。電車の中や、帝廟の廊下や、銀座通りや、さう云ふ場所であつた。令嬢のうちは、云ふ迄もなくナオミ以上に美しい人が澤山あつた。ナオミの器量がよくなるかどうかは將來の問題で、十五やそこらの小娘ではこれから先が樂しみでもあり、心配でもあつた。ですから最初の私の計畫は、兎に角此の兒を引き取つて世話をしてやらう。そして望みがありさうなら、大いに教育してやつて、自分の妻に貰ひ受けても差支へない。——と、云ふくらゐな程度だつたのです。此れは一面から云ふと、彼女に同情した結果なのですが、他の一面には私自身のあまりに平凡な、あまりに單調なその日暮らしに、多少の變化を與へてゐたかつたからでもあるのです。正直のところ、私は長年の下宿住居に飽きてゐたので、何とかして、此の殺風景な生活

に一點の色彩を添へ、温かみを加へて見たいと思つてゐました。それにはたとへ小さくとも一軒の家を構へ、部屋を飾るとか、花を植ゑるとか、日あたりのいいエランダに小鳥の籠を吊るすとかして、臺所の川事や、拭き掃除をさせるために女中の一人も置いたらどうだらう。そしてナオミが来てくれたらば、彼女は女中の役もしてくれ、小鳥の代りにもなつてくれよう。と、大體そんな考へでした。

そのくらゐなら、なぜ相當な所から嫁を迎へて、正式な家庭を作らうとしなかつたのか？

——と云ふと、要するに私はまだ結婚をするだけの勇氣がなかつたのでした。此れに就いては少し詳しく話さなければなりません、一體私は常識的な人間で、突飛なことは嫌ひな方だし、出来もしなかつたのですけれど、しかし不思議に、結婚に對しては可なり進んだ、ハイカラな意見を持つてゐました。一結婚と云ふと世間の人は大さう事を堅苦しく、儀式張らせる傾向がある。先づ第一に橋渡しと云ふものがある。それとなく雙方の考へをあたつて見る。次には「見合ひ」と云ふ事をする。さてその上で雙方に不服がなければ改めて媒人を立て、結婚を取り交はし、五荷とか、七荷とか、十三荷と

か、花嫁の荷物を婚家へ運ぶ。それから奥入れ、新婚旅行、里歸り、……と随分面倒な手續きを踏みますが、さう云ふことがどうも私は嫌ひでした。結婚するならもつと簡單な、自由な形式でしたいものだと思つてゐました。

あの時分、若しも私が結婚したいなら候補者は大勢あつたでせう。田舎者ではありますけれども、體格は頑丈だし、品行は方正だし、さう云つては可笑しいが男前も普通であるし、會社の信用もあつたのですから、誰でも喜んで世話をしてくれたでせう。が、實のところ、この「世話をされる」と云ふことがイヤなのだから、仕方がありませんでした。たとへ如何なる美人があつても、一度や二度の見合ひでもつて、お互ひの意氣や性質が分る筈はない。「まあ、あれならば」とか、「ちよつときれいだ」とか云ふくらゐな、ほんの一時の心持ちで一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことが出来るものぢやない。それから思へばナオミのやうな少女を家に引き取つて、徐ろにその成長を見届けてから、氣に入つたらば妻に貰ふと云ふ方法が一番いい。何も私は財産家の娘だの、教育のある偉い女が欲しい譯ではないのですから、それで澤山なものでした。

のみならず、一人の少女を友達にして、朝夕彼女の發育のさまを眺めながら、明るく晴れやかに、云はば遊びのやうな氣分で、一軒の家に住むと云ふことは、正式の家庭を作るのとは逆つた、又格別な興味があるやうに思へました。つまり私とナオミでたわいのないまま、ごとをする。「世帯を持つ」と云ふやうなシチ面倒な意味でなしに、空氣なシンブル・ライフを送る。

此れが私の望みでした。實際今の日本の「家庭」は、やれ算符だとか、長火鉢だとか、座布團だとか云ふ物が、あるべき所に必ずなければいけなかつたり、主人と細君と下女との仕事がいやにキチンと分れてゐたり、近所隣りや親類同士の付き合いがうるさかつたりするもので、その爲めに餘計な入費も懸るし、簡単に済ませることが煩雜になり、窮屈になるし、年の若いサラリーマンには決して愉快なことでもなく、いいことでもありません。その點に於いて私の計畫は、たしかに一種の思ひつきだと思ひました。

私がナオミに此のことを話したのは、始めて彼女を知つてから二た月ぐらゐ立つた時分だつたでせう。その間、私は始終、暇さへあればカフェエ・ダイヤモンドへ行つて、出来るだけ

彼女に親しむ機会を作つたものでした。ナオミは大變活動寫眞が好きでしたから、公休日には私と一緒に公園の館を覗きに行つたり、その歸りにはちよつとした洋食屋だの、蕎麥屋だのへ寄つたりしました。無口な彼女はそんな場合にもいたつて言葉数が少ない方で、嬉しいのだから詰まらないのだから、いつも大抵はむつとりとしてゐます。そのくせ私が誘ふときは、決して「いや」とは云ひませんでした。「ええ、行つてもいいわ」と、素直に答へて、何處へでも附いて行くのでした。

一體私をどう云ふ人間と思つてゐるのか、どう云ふつもりで附いて來るのか、それは分りませんでした。まだほんたうの子供なので、彼女は「男」と云ふ者に疑ひの眼を向けようとしてない。此の「伯父さん」は好きな活動へ連れて行つて、ときどき御馳走をしてくれるから、一緒に遊びに行くのだと云ふだけの、極く單純な、無邪氣な心持ちでゐるのだらうと、私は想像してゐました。私にしたつて、全く子供のお相手になり、優しい親切な「伯父さん」となる以上のこととは、當時の彼女に望みもしなければ、素振りにも見せはしなかつたのです。あの時分の、淡い、夢のやうな月日のことを考へ出すと、

お伽噺の世界にでも住んでゐたやうで、もう一度ああ云ふ罪のない二人になつて見たいと、今でも私はさう思はずにはゐられません。

「どうだね、ナオミちゃん、よく見えるかね?」

と、活動小屋が満員で、空いた席がない時など、後ろの方に並んで立ちながら、私はよくそんな風に云つたものです。するとナオミは、

「いいえ、ちつとも見えないわ。」

と云ひながら一生懸命に背伸びをして、前のお客の首と首の間から覗かうとする。

「そんなにしたつて見えやしないよ、此の木の上へ乗つかつて、私の肩へ掴まつて御覧。」

さう云つて私は、彼女を下から押し上げてやつて、高い手すりの横木の上へ腰かけさせる。彼女は兩足をぶらぶらさせながら、片手を私の肩へあてがつて、やつと満足したやうに、息を凝らして繪の方を視つめる。

「面白いわい?」
と云へば、
「面白いわい、」

と云ふだけで、手を叩いて愉快がつたり、跳ひ上つて喜んだりするやうなことではないのですが、賢い犬が遠い物音を聞き澄ましてゐるやうに、黙つて、惻巧さうな眼をパツチリ開い

て見物してゐる顔つきは、餘程寫眞が好きなのだと頷かれました。

「ナオミちゃん、お前お腹が減つてやしないか?」

さう云つても、

「いいえ、なんにも喰べたくない。」

と云ふこともありすが、減つてゐる時は遠慮なく「ええ」と云ふのが常でした。そして、洋食なら洋食、お蕎麥ならお蕎麥と、尋ねられればハツキリと喰べたい物を答へました。

二

「ナオミちゃん、お前の顔はメリー・ピクフォードに似てゐるね。」

と、いつのことでしたか、ちやうどその女優の映畫を見てから、歸りにとある洋食屋へ寄つた晩に、それが話通に上つたことがありました。

「さう。」

と云つて、彼女は別にうれしさうな表情もしないで、突然そんなことを云ひ出した私の顔を不思議さうに見ただけでしたが、「お前はさうは思はないかね。」と、重ねて聞くと、

「似てゐるかどうか分らないけれど、でもみんなが私のことを酒血見みたいだつてさう云ふわよ。」

と、彼女は済まして答へるのです。

「そりやさうだらう、第一お前の名前からして變つてゐるもの、ナオミなんてハイカラな名前を、誰がつけたんだね。」

「誰がつけたか知らないわ。」

「お父つあんかねお母さんかね、——」

「誰だか、——」

「ぢやあ、ナオミちゃんのお父つあんは何の商賣をしてるんだい。」

「お父つあんはもう居ないの。」

「お母さんは？」

「お母さんは居るけれど、——」

「ぢや、兄弟は？」

「兄弟は大勢あるわ、兄さんだの、姉さんだの、妹だの、——」

それから後もこんな話はたびたび出たことがありますけれど、いつも彼女は、自分の家庭の事情を聞かれると、ちよつと不愉快な顔つきをして、言葉を濁してしまふのでした。で、一緒に遊びに行くときは大抵前の日に約束をして、きめた時間に公園のベンチとか、観音様

のお堂の前とかで待ち合はせることにしたのですが、彼女は決して時間を違へたり、約束をつづかしたりしたことはありませんでした。

何かの都合で私の方が遅れたりして、「あんまり待たせ過ぎたから、もう歸つてしまつたかな」と、案じながら行つて見ると、矢張りキチンと其處に待つてゐます。そして私の姿に気が付くと、ふいと立ち上つてつかつか此方へ歩いて来るのです。

「御免よ、ナオミちゃん、大分長いこと待つただらう。」

私がさう云ふと、

「ええ、待つたわ、」

と云ふだけで、別に不平さうな様子もなく、怒つてゐるらしくもないのでした。或る時などはベンチに待つてゐる約束だったのが、急に雨が降り出したので、どうしてゐるかと思ひながら出かけて行くと、あの、池の側にある何様だかの小さい祠の軒下にしゃがんで、それでもちやんと待つてゐたのには、ひどくいぢらしい氣がしたことがあります。

さう云ふ折の彼女の服装は、多分姉さんのお譲りらしい古ぼけた鎧袖の衣を着て、めりんと左染の帯をしめて、髪は日本風の桃割れに結

ひ、うすくお白粉を塗つてゐました。そしていつでも、繼ぎはあつてゐましたけれど、小さな足にビツチリと嵌まつた、恰好のいい白足袋を穿いてゐました。どういふ譯で休みの日だけ日本髪にするのかと聞いて見ても一内でさうしろと云ふもんだから」と、彼女は相變らず詳しい説明はしませんでした。

「今夜はおそくなつたから、家の前まで送つて上げよう。」

私は再び、さう云つたこともありましたが、「いいわ、直き近所だから獨りで歸れるわ。」

と云つて、花屋敷の角まで來ると、きつとナオミは左様なら」と云ひ捨てながら、千重町の横丁の方へバタバタ駆け込んでしまふのでした。

さうです、——あの頃のことを餘りいくどくど記す必要はありませんが、一度私は、やや打ち解けて、彼女とゆつくり話をした折がありました。

それは何でもいとしと春雨の降る、生暖かい四月の末の宵だつたでせう。ちやうど其晩はカフエが暇で、大さう静かだったので、私は長いことテーブルに構へて、ちびちび酒を飲んでゐました。——かう云ふとひどく酒飲みの

やうですけれど、實は私は甚だ下戸の方なので、時間つぶしに、女の飲むやうな甘いコクテルを拵へて貰つて、それをホンの一口づつ、舐めるやうに吸つてゐたのに過ぎないのですが、そこへ彼女が料理を運んで来てくれたので、「ナオミちゃん、まあちよつと此處へおかけ。」と、いくらか酔つた勢でさう云ひました。

「なあに、」

と云つて、ナオミは大人しく私の側へ腰をおろし、私がポケットから敷島を出すと、すぐにマツチを擦つてくれました。

「まあ、いいだらう、此處で少うしいやべつて行つても。——今夜はあまり忙しくもなささうだから。」

「ええ、こんなことはめつたにありはしないのよ。」

「いつもそんなに忙しいかい？」

「忙しいわ、朝から晩まで、——本を読む暇もありやしないわ。」

「ぢやあナオミちゃんは、本を読むのが好きなんだね。」

「ええ、好きだわ、」

「一體どんな物を読むのさ、」

「いろいろな雑誌を見るわ、讀物なら何でも

いいの。」

「そりや感心だ、そんなに本が讀みかつたら、女學校へでも行けばいいのに。」

私はわざとさう云つて、ナオミの顔を覗き込むと、彼女は癢に觸つたのか、つんと済まして、あらぬ方角をちつと視つめてゐるやうでしたが、その眼の中には、明かに悲しいやうな、遺る瀟々しいやうな色が浮かんてゐるのです。

「どうだね、ナオミちゃん、ほんたうにお前、學問をしたい氣があるかね。あるなら僕が習はせて上げてもいいけれど。」

それでも彼女が黙つてゐますから、私は今度こそは慰めるやうな口調で云ひました。

「え？ ナオミちゃん、黙つてゐないで何とかお云ひよ。お前は何をやりたいんだい、何が習つて見たいんだい？」

「あたし、英語が習ひたいわ。」

「ふん、英語と、——それだけ？」

「それから音楽もやつてみたいの。」

「ぢや、僕が月謝を出してやるから、習ひに行つたらいいぢやないか。」

「だつて女學校へ上るのは遅過ぎるわ。もう十五なんですよもの。」

「なあに、男と違つて女は十五でも遅くはな

いさ。それとも英語と音楽だけなら、女學校へ行かないだつて、別に教師を頼んだらいいさ。どうだい、お前眞面目にやる氣があるかい？」

「あるにはあるけれど、——ぢや、ほんたうにやらしてくれませんか？」

さう云つてナオミは、私の眼の中を俄かにハッキリ見据ゑました。

「ああ、ほんたうとも。だがナオミちゃん、もしさうなれば此處に奉公してゐる譯には行かなくなるが、お前の方はそれで差支へないのかね。お前が奉公を止めていいなら、僕はお前を引き取つて世話をしてみたいんだけれど。」

さうして何處までも責任を以て、立派な女に仕立ててやりたいと思ふんだけれど。」

「ええ、いいわ、さうしてくれれば。」

何の躊躇するところもなく、言下に答へたキツパリとした彼女の返辭に、私は多少の驚きを感じないではゐられませんでした。

「ぢや、奉公を止めると云ふのかい？」

「ええ、止めるわ。」

「だけどナオミちゃん、お前はそれでいいにしまつて、おツ母さんや兄さんが何と云ふか、家の都合を聞いて見なけりやならぬいだらうが。」

「家の都合なんか、聞いて見ないでも大丈夫だ

わ。誰も何とも云ふ者はありやしないの。」

と、口ではさう云つてゐたものの、その實彼女がそれを案外氣にしてゐたことは確かでした。つまり彼女のいつもの癖で、自分の家庭の内幕を私に知られるのが嫌さに、わざと何でもないやうな素振りを見せてゐたのです。私もそんなに嫌がるものを無理に知りたくはないのでしたが、しかし彼女の希望を實現させる爲めには、矢張りどうしても家庭を訪れて彼女の母なり兄なりに篤と相談をしなければならぬ。で、二人の間にその後だんだん話が進行するに従ひ、

「一遍お前の身内の人に會はしてくれろ」と、何度もうさう云つたのですが、彼女は不思議に喜ばないで、

「いいのよ、會つてくれないでも。あたし自分で話をするわ。」

と、さう云ふのが極まり文句でした。

私はここで、今では私の妻となつてゐる彼女の爲めに、「河合夫人」の名譽の爲めに、強ひて彼女の不機嫌を買つてまで、當時のナオミの身許や素性を洗ひ立てる必要はありませんから、成るべくそれには觸れないことにして置ませう。後で自然と分つて來る時もありませう

し、さうでない迄も彼女の家が千束町にあつたこと、十五の歳にカフェエの女給に出されてゐたこと、そして決して自分の住居を人に知らせようとしなかつたことなどを考へれば、大凡そんな家庭であつたかは誰にも想像がつく筈です。から、い、や、そればかりではありません、私は結局彼女を説き落して母だの兄だのに會つたのですが、彼等は殆んど自分の娘や妹の貞操と云ふことに就いては、問題にしてゐないのでした。私が彼等に持ちかけた相談と云ふのは、折角當人も學問が好きだと云ふし、あんな所に長く奉公させて置くのも惜しい兄のやうに思ふから、其方でお差支へがないのなら、どうか私に身柄を預けては下さるまいか。どうせ私も十分な事は出来まいけれど、女中が一人欲しいと思つてゐた際でもあるし、まあ臺所や拭き掃除の用事ぐらゐはして貰つて、そのあひ間に一通りの教育はさせて上げますが、勿論私の境遇だのまだ獨身であることなどをすっかり打ち明けて頼んで見ると、「さうして頂けば誠に當人も仕合せでして、……」と云ふやうな、何だか張り合ひがなさ過ぎるくらゐな挨拶でした。全く此れではナオミの云ふ通り、會ふ程のことはなかつたのです。

世の中には随分無責任な親や兄弟もあるものだ、私はその時つくづくと感じましたが、それだけ一層ナオミがいぢらしく、哀れに思へてなりません。何でも母親の言葉に依ると、彼等はナオミを持って扱つてゐたらしいので、「實は此の兒は養子にする筈でございまして、當人の氣が進みませんものですから、さういつ迄も遊ばせて置く譯にも參らず、據んどころなくカフェエへやつて置きましたので」と、そんな口占でしたから、誰かが彼女を引き取つて成人させてくれさへすれば、まあ兎も角も一安心と云ふやうな次第だつたのです。ああ成る程、それで彼女は家にゐるのが嫌だものだから、公休日にはいつも戶外へ遊びに出て、活動寫眞を見に行つたりしたんだ、雨が降つても槍が降つてもきつと私を待つてゐたのはそのせゐなんだと、事情を聞いてやつと私もその謎が解いたのでした。

が、ナオミの家庭がさう云ふ風であつたことは、ナオミに取つても私に取つても非常な幸運だつた譯で、話が極まる直きに彼女はカフェエから暇を貰ひ、毎日毎日私と二人で適當な借家を捜しに歩きました。私の勤め先が大井町でしたから、成るべくそれに便利な所を擇

ばうと云ふので、日曜日には朝早くから新橋の驛に落ち合ひ、さうでない日はちやうど會社の退けた時刻に大井町で待ち合はせて、蒲田、大森、品川、目黒、主としてあの邊の郊外から、市中では高輪や田町や三田あたりを廻つて見て、さて歸りには何處かで一緒に晩飯をたべ、時間があれば例の如く活動寫眞を撮いたり、銀座通りをぶらついたりして、彼女が千束町の家へ、私は芝日の下宿へ戻る。たしかその頃は、借家が掃底な時でしたから、手頃な家がなかなかオイソレと見つからないで、私たちは半月あまりも斯うして暮らしたものでした。

もしもあの時分、麗かな五月の日曜日の朝などに、大森あたりの青葉の多い郊外の路を、肩を並べて歩いてゐる會社員らしい一人の男と、桃畑に結つた見すばらしい小娘の様子を、誰かが注意してゐたとしたら、まあどんな風に見えるでせうか？ 男の方は小娘を「ナオミちゃん」と呼び、小娘の方は男を「河合さん」と呼びながら、主従ともつかず、兄妹ともつかず、さればと云つて夫婦とも友達ともつかぬ恰好で互ひに少し遠慮しいしい語り合つたり、番地を尋ねたり、附近の景色を眺めたり、ところどころの生垣や、邸の庭や、路端などに咲いて

ゐる花の色香を振り返つたりして、晩春の長い一日を彼方此方と幸福さうに歩いてゐた此の二人は、定めし不思議な取り合はせだつたに違ひありません。花の話で想ひ出すのは、彼女が大變西洋花を愛してゐて、私などにはよく分らないいろいろな花の名前——それも面倒な英語の名前を澤山知つてゐたことでした。カフェエに奉公してゐた時分に、花瓶の花を始終扱ひつけてゐたので自然に覺えたのださうですが、通りすがりの門の中などに、たまたま温室があつたりすると、彼女は眼敏くも直ぐ立ち止まつて、

「まあ、綺麗な花！」

と、さも嬉しさうに叫んだものです。

「ぢや、ナオミちゃんは何の花が一番好きだね。」

と、尋ねてみたとき、

「あたし、チューリップが一番好きよ。」

と、彼女はさう云つたことがあります。

淺草の千束町のやうな、あんなゴミゴミした路次の中に育つたので、却つてナオミは反動的にひろびろとした田園を慕ひ、花を愛する習慣になつたのでありませうか。薔薇、たんぽぽ、げんげ、櫻草、——そんな物でも如の昨や田舎

道などに生えてゐると、忽ちチヨコチヨコと驅けて行つて摘まうとする。そして終日歩いてゐるうちに彼女の手には摘まれた花が一杯になり、幾つとも知れない花束が出来、それを大事に歸り途まで持つて來ます。

「もうその花はみんな萎んでしまつたぢやないか、好い加減に捨てておしまひ。」

さう云つても彼女はなかなか承知しないで、「大丈夫よ、水をやつたら又直ぐ生きッ返るから、河合さんの机の上へ置いてらいいわ。」と、別れるときにその花束をいつも私にく

れるのでした。

かうして方方捜し廻つても容易にいい家が見つからないで、散々迷ひ抜いた揚句、結局私たちが借りることになつたのは、大森の驛から十二三町行つたところの、省線電車の線路に近い、とある一軒の甚だお粗末な洋館でした。

所謂「文化住宅」と云ふ奴、——まだあの時分は

それがそんなに流行つてはゐませんでした、近頃の言葉で云へばさしづめさう云つたものだつたでせう。勾配の急な、全體の高さの半分以上もあらうかと思はれる、赤いスレートで葺いた屋根。マツチの箱のやうに白い壁で包んだ外側、ところどころに切つてある長方形のガ

ラス窓。そして正面のボーチの前に、庭と云ふよりは寧ろちよつとした空地がある。と、先づそんな風な恰好で、中に住むよりは繪に描いた方が面白さうな見つきでした。尤もそれはその筈なので、もと此の家は何とか云ふ繪かきが建て、モデル女を細君にして二人で住んでゐたのださうです。從つて部屋を取り方などは随分不便に出来てゐました、いやにだだ、ツ廣いアトリエと、ほんのささやかな玄關と、臺所と、階下にはたつたそれだけしかなく、あとは二階に三疊と四疊半とがありましたが、それとて屋根裏の物置小屋のやうなもので、使へる部屋ではありませんでした。その屋根裏へ通ふにはアトリエの室内に梯子段がついてゐて、そこを上ると手すりを繞らした廊下があり、恰も芝居の棧敷のやうに、その手すりからアトリエを見おろせるやうになつてゐました。

ナオミは最初此の家の「風景」を見ると、「まあ、ハイカラなこと！ あたし斯う云ふ家がいいわ。」

と、大さう氣に入つた様子でした。そして私も、彼女がそんなに喜んだので直ぐ借りることに賛成したのです。

多分ナオミは、その子供らしい考へで、間取り

の工合など實用的でなくつても、お伽噺の挿繪のやうな、一風變つた様式に好奇心を感じたのでせう。たしかにそれは香氣な青年と少女とが、成るたけ世帯じみないやうに、遊びの心持ちで住まはうと云ふにはいい家でした。前の繪かきとモデル女もさう云ふつもりで此處に暮らしてゐたのでせうが、實際たつた二人であるなら、あのアトリエの一と間だけでも、寝たり起きたり食つたりするには充分用が足りたのです。

三

私がいいよナオミを引き取つて、その「お伽噺の家」へ移つたのは、五月下旬のことでしたらう。這入つて見ると思つたほどに不便でもなく、日あたりのいい屋根裏の部屋からは海が眺められ、南を向いた前の空地は花壇を造るのに都合がよく、家の近所をときどき省線の電車の通るのが取でしけれど、間にちよつとした田圃があるのでそれもそんなにやかましくはなく、先づ此れならば申し分のない住居でした。のみならず、何分さう云ふ普通の人には不適當な家でしたから、思ひの外に家賃が安く、一般に物價の安いあの頃のことではありましたが、敷金なしの月月二十圓といふので、それも私には氣に入りました。

「ナオミちゃん、これからお前は私のことを『河合さん』と呼ばないで『讓治さん』とお呼び。そしてほんとに友達やうに暮らさうぢやないか。」

と、引つ越した日に私は彼女に云ひ聞かせました。勿論私の郷里の方へも、今度下宿を引き拂つて一軒家を持つたこと、女中代りに十五になる少女を雇ひ入れたこと、などを知らせてやりましたけれど、彼女と「友達」のやうに暮らすとは云つてやりませんでした。國の方から身内の者が訪ねて來ることはめつたにないのだし、いづれそのうち、知らせる必要が起つた場合には知らせてやらうと、さう考へてゐたのです。

私たちは暫くの間、此の珍らしい新居にふさはしいいろいろの家具を買ひ求め、それらをそれぞれ配置したり飾りつけたするために、忙しい、しかし楽しい月日を送りました。私は成るべく彼女の趣味を感發するやうに、ちよつとした買ひ物をするのにも自分一人では極めないで、彼女の意見を云はせるやうにし、彼女の頭から出る考へを出来るだけ採用したのですが、もともと算奇だの長火鉢だのと云ふやうな、在り來たりの世帯道具は置き所のない家では

あるだけ、従つて選擇も自由であり、どうでも自分等の好きなやうに意匠を施せるのです。私たちは印度更紗の安物を見つけて来て、それをナオミが危ツかしい手つきで縫つて窓かけに作り、芝口の西洋家具屋から古い藤椅子だのソファだの、安樂椅子だの、テーブルだのを搜して来てアトリエに並べ、壁にはメリー・ピクフォードを始め、亞米利加の活動女優の寫眞を二つ三つ吊るしました。そして私は寢道具なども、出来ることなら西洋流にしたいと思つたのですけれど、ベッドを二つも買ふとなると入費が懸るばかりでなく、夜ト布圍なら田舎の家から送つて貰へる便宜があるので、とうとうそれはあきらめなければならませんでした。が、ナオミの爲めに田舎から送つてよしたのは、女中を寢かす夜具でしたから、お約束の唐草模様の、ゴワゴワした木綿の煎餅布圍でした。私は何だか可哀さうな氣がしたので、「此れではちよつとひど過ぎるね、僕の布圍と一枚取換へて上げようか。」と、さう云ひましたが、「うん、いいの、あたし此れで澤山。」と云つて、彼女はそれを引つ被つて、獨り淋しく屋根裏の三疊の部屋に寢ました。

私は彼女の隣りの部屋——同じ屋根裏の、四疊半の方へ寢るのでしたが、毎朝毎朝、眼をさますと私たちは、向うの部屋と此方の部屋とで、布圍の中にもぐりながら聲を掛け合つたものでした。

「ナオミちゃん、もう起きたかい。」

と、私が云ひます。

「ええ、起きてるわ、今もう何時？」

と、彼女が應じます。

「六時半だよ、——今朝は僕がおまんまを炊いてあげようか。」

「さう？ 昨日あたしが炊いたんだから、今日は讓治さんが炊いてもいいわ。」

「ぢや仕方がない、炊いてやらうか。面倒だからそれともパンで済ましてかうか。」

「ええ、いいわ、だけど讓治さんは随分ずるいわ。」

そして私たちは、御飯がたべたければ小さな土鍋で米を炊ぎ、別にお膳へ移す迄もなくテーブルの上へ持つて来て、鎌詰か何かを突ツつきながら食事をします。それもうるさくて厭だと思へば、パンに牛乳にジャムでごまかしたり、西洋菓子を買込んで置いたり、晩飯などはそばや、うどん、間に合はせたり、少し御馳走が欲し

い時には二人で近所の洋食屋まで出かけて行きます。

「讓治さん、今日はピフテキをたべさせてよ。」などと彼女は、よくそんなことを云つたものです。

朝飯を済ませると、私はナオミを獨り残して會社へ出かけます。彼女は午前中は花壇の草花をいぢくつたりして、午後になるとカラツぽの家へ鏡をおろして、英語と音楽の稽古に行きました。英語は寧ろ始めから西洋人に就いた方がよからうと云ふので、日黒に住んでゐる亞米利加人の老嬢のミス・ハリソンと云ふ人の所へ、一日置きに會話とリーダーを習ひに行つて、足りないところは私が内できとときき渡つてやることにしました。音楽の方は、此れは全く私にはどうしたらいいか分りませんでした。が、二三年前に上野の音楽學校を卒業した或る婦人が、自分の家でピアノと聲樂を教へると云ふ話を聞き、此の方は毎日芝の伊皿子まで一時間づつ授業を受けに行くのでした。ナオミは銘仙の着物の上に紺のカシマの袴をつけ、黒い靴下に可愛い小さな半靴を穿き、すつかり女學生になりすまして、自分の理想がやうやうかなつた嬉しさに胸をときめかせながら、せつせと通ひまし

た。をりをり歸り途などに彼女と往來で遇つたりすると、もうどうしても千束町に育つた娘で、カフエエの女給をしてゐた者とは思へませんでした。髪もその後は桃割れに結つたことは一度もなく、リボンで結んで、その先を纏んで、お下げにして垂らしてゐました。

私は前に「小鳥を飼ふやうな心持ち」と云ひましたつが、彼女は此方へ引き取られてから顔色などもだんだん健康さうになり、性質も次第に變つて来て、ほんたうに快活な、晴れやかな小鳥になつたのでした。そしてそのだッ廣いアトリエの一と間は、彼女のためには大きな鳥籠だつたのです。五月も暮れて明るい初夏の氣候が来る。花壇の花は日増しに伸びて色彩を増して来る。私は會社から、彼女は稽古から、夕方家へ歸つて来ると、印度更紗の窓かけを洩れる太陽は、眞つ白な壁で塗られた部屋四方を、いまだにカツキリと晝間のやうに照らしてゐる。彼女はフランクルの單衣を着て、素足にスリッパを突ツかけて、とんとん床を踏みながら習つて来た唄を歌つたり、私を相手に眼隠しだの鬼ごっこをして遊んだり、そんな時にはアトリエ中をぐるぐると走り廻つて、テーブルの上を飛び越えたり、ソファの下にもぐ

り込んだり、椅子を引つ繰り覆したり、まだ足らないで梯子段を駆け上つては、例の樓敷のやうな屋根裏の廊下を、鼠の如くチヨコチヨコと往つたり來たりするのです。一度は私が馬になつて彼女を背中に乗せたまま、部屋の中を這つて歩いたことがあります。

「ハイ、ハイ、ドウ、ドウ！」

と云ひながら、ナオミは手拭を手綱にして、私にそれを咬へさせたりしたものです。

矢張りさう云ふ遊びの日の出来事でしたらう、——ナオミがききやつきやつと笑ひながら、あまり元氣に梯子段を上つたり下りたりし過ぎたので、とうとう足を踏み外して頂邊から轉げ落ちた揚句、急にしくしく泣き出したことがありましたの。

「おい、どうしたの、——何處を打つたんだか見せて御覽。」

と、私がさう云つて抱き起すと、彼女はそれでもまだしくしくと鼻を鳴らしつつ、袂をまくつて見せましたが落ちる拍子に針か何かに觸つたのでせう、ちやうど右腕の脇のところの皮が破れて、血がにじみ出てゐるのです。

「何だい、此れッぼちの事で泣くなんて！ き、絆着絆を貼つてやるから此方へおいで。」

そして膏藥を貼つてやり、手拭を裂いて綿帯をしてやる間も、ナオミは一杯涙をためて、ぼたぼた涙を滴らしながらしやくり上げる顔つきが、まるで頑足ない子供のやうでした。傷はそれから運悪く膿を持つて、五六日経ちませんでした。毎日綿帯を取り替へてやる度毎に、彼女はきつと泣かないことはなかつたのです。

しかし私は、既にその頃ナオミを戀してゐたかどうか、それは自分にはよく分りません。さう、たしかに戀してゐたのでせうが、自分自身のつもりでは寧ろ彼女を育ててやり、立派な婦人に仕込んでやるのが楽しみなので、ただそれだけでも満足出来るやうに思つてゐたのです。が、その年の夏、會社の方から二週間の休暇が出たので、毎年の例で私は歸省することになり、ナオミを淺草の實家へ預け、大森の家に戸締りをして、さて田舎へ行つて見ると、その二週間と云ふものが、溜らなく私には單調で、淋しく感ぜられたものです。あの兒が居ないとこんなにも詰まらないものか知らん、此れが戀愛の初まりなのではないか知らん、と、その時始めて考へました。そして母親の前を好い加減に云ひ繕つて、豫定を早めて東京へ着くと、もう夜の十時過ぎでしたけれど、いきなり上野の停車場か

らナオミの家までタクシーを走らせました。

「ナオミちゃん、歸つて来たよ。角に自動車が待たしてあるから、此れから直ぐに大森へ行かう。」

「さう、ぢや今直ぐ行くわ。」

と云つて、彼女は私を格子の外へ待たして置いて、やがて小さな風呂敷包みを提げながら出て來ました。それは大さう蒸し暑い晩のことでしたが、ナオミは白つぽい、ふわふわした、薄紫の葡萄の模様のあるモスリンの單衣を纏つて、幅のひろい、派手な褐色のリボンで髪を結んでゐました。そのモスリンは先達のお盆に買つてやつたので、彼女はそれを留守の間に、自分の家で仕立てて貰つて着てゐたのです。

「ナオミちゃん、毎日何をしてゐたんだい？」

車が賑やかな廣小路の方へ走り出すと、私は彼女と並んで腰かけ、心持ち彼女の方へ顔をすり寄せるやうにしながら云ひました。

「あたし毎日活動寫眞を見に行つてたわ。」

「ぢや、別に淋しくはなかつたらうね。」

「ええ、淋しいことなんかなかつたけれど、

……」

さう云つて彼女はちよつと考へて、

「でも讓治さんは、思つたより早く歸つて來た

のね。」

「田舎にゐたつて詰まらないから、豫定を切り上げて來ちまつたんだよ。やつぱり東京が一番だなア。」

私はさう云つて、はつと溜息をつきながら、窓の外にちらちらしてゐる都會の夜の花やかな灯影を、云ひやうのない懐かしい氣持ちで眺めたものです。

「だけどあたし、夏は田舎もいいと思ふわ。」

「そりや田舎にもよりけりだよ、僕の家なんか草深い百姓家で、近所の景色は平凡だし、名所古蹟がある譯ぢやなし、眞つ書間から蚊だの蠅だのがぶんぶん叩つて、とても暑くつてやり切れやしない。」

「まあ、そんな所？」

「そんな所さ。」

「あたし、何處か、海水浴へ行きたいなあ。」突然さう云つたナオミの口調には、だだッ兒のやうな可愛らしさがありました。

「ぢや、近いうちに涼しい處へ連れて行かうか、鎌倉がいいかね、それとも箱根かね。」

「温泉よりは海がいいわ、——行きたいなア、ほんたうに。」

その無邪氣さうな聲だけを聞いてゐると、矢張り以前のナオミに違ひないのでしたが、何だかほんの十日ばかり見なかつた間に、急に身體が伸び伸びと育つて來たやうで、モスリンの單衣の下に息づいてゐる圓みを持つた肩の形や乳房のあたりを、私はそつと偷み視ないではゐられませんでした。

「此の着物はよく似合ふね、誰に縫つて貰つたの？」

と、暫く立つてから私は云ひました。

「おツ母さんが縫つてくれたの。」

「内の評判はどうだつたい、見立てが上手だと云はなかつたかい。」

「誰が見立てたんだつて、云つてたわ。」

「僕が見立てたつてさう云つたかい。」

「ええ、云つたわ、——悪くはないけれど、あんまり柄がハイカラ過ぎるツて、——」

「おツ母さんがさう云ふのかい。」

「そえ、さう、——内の人たちにやなんにも分りやしないのよ。」

さう云つて彼女は、遠い所を視つめるやうな眼つきをしながら、

「みんながあたしを、すつかり變つたつて云つてたわ。」

「どんな風に變つたつて？」

「恐ろしくハイカラになつちやつたつて。」

「そりやさうだらう、僕が見たつてさうだからなあ。」

「さうか知ら。——一遍頭を日本髪に結つて御覽で云はれたけれど、あたしイヤだから結はなかつたわ。」

「ぢやあそのリボンは？」

「此れ？ 此れはあたしが仲店へ行つて自分で買つたの。どう？」

と云つて、頭をひねつて、さらさらとした油気のない髪の毛を風に吹かせながら、そこにひらひら舞つてゐる掬色の布を私の方へ示しました。

「ああ、よく映るね、かうした方が日本髪よりいくらいいか知れやしない。」

「ふん」

と、彼女は、その獅子ッ鼻の先を、ちよいとしやくつて意を得たやうに笑ひました。悪く云へば小生意氣な此の鼻先の笑ひ方が彼女の癖ではありましたが、それが却つて私の眼には大へん惻巧さうに見えたものです。

四

ナオミがしきりに「鎌倉へ連れてツてよう！」

とねだるので、ほんの二三日滞在のつもりで出かけたのは八月の初め頃でした。

「なぜ二三日でなけりやいけないの？ 行くなら十日か一週間ぐらゐ行つて居なけりや詰まらないわ。」

彼女はさう云つて、出がけにちよつと不平さうな顔をしました。が、何分私は會社の方が忙がしいといふ口實の下に郷里を引き揚げて來たのですから、それがバレると母親の手前、少し合が悪いのでした。が、そんなことをいふと却つて彼女が肩身の狭い思ひをするであらうと察して、

「ま、今年は二三日で我慢をしてお置き、來年は何處か變つたところへゆつくり連れて行つて上げるから。——ね、いいぢやないか。」

「だつて、たつた二三日ぢやあ。」

「そりやさうだけれども、泳ぎたけりや歸つて來てから、大森の海岸で泳げばいいぢやないか。」

「あんな汚い海で泳げはしないわ。」

「そんな分らないことを云ふもんぢやないよ、ね、いい兒だからさうおし、その代り何か着物を買つてやるから。——さう、さう、お前は洋服が欲しいと云つてゐたぢやないか。だから洋服を揃へて上げよう。」

その「洋服」といふふきに釣られて、彼女はやつと納得が行つたのでした。

鎌倉では長谷の金波樓と云ふ、あまり立派でない海水旅館へ泊まりました。それに就いて今から思ふと可笑しな話があるのです。と云ふのは、私のふところには此の暑期に貰つたボーナスが大部分残つてゐましたから、本來ならば何も二三日滞在するのに儉約する必要はなかつたのです。それに私は、彼女と始めて泊まりがけの旅に出ると云ふことが愉快でなりませんでしたから、なるべくならばその印象を美しいものにするために、あまりケチケチした眞似はしないで、宿屋なども一流の所へ行きたいと、最初はそんな考へてゐました。ところがいいよと云ふ日になつて、横須賀行の二等室へ乗り込んだ時から、私たちは一種の氣後れに襲はれたのです。なぜかと云つて、その汽車の中には返子や鎌倉へ出かける夫人や令嬢が澤山乗合はしてゐて、ずらりとときらびやかな列を作つてゐましたので、さてその中に割込んで見ると、私は兎に角、ナオミの身なりがいかにも見すばらしく思へたものでした。

勿論夏のことで、その夫人達や令嬢